

学校の先生は、よく「指導」という言葉を使う。この言葉の名のもとに、話すこともあれば、書くこともある。教員が使う用語ベスト3に入るのではなかろうか。一番となると、「子ども（生徒）」だろうか。授業を中心とした学習指導も指導、生徒指導も指導、部活動でも指導、学校には指導が溢れている。まさに指導だらけである。

ここで、考えてみたい。いったい「指導」とはどのようなことなのか。「校長先生、指導しておきました」このような場合は、大抵、“指導＝話す”である。確かに、指導には違いないかもしれない。だが、言葉にして言えば、それで指導なのだろうか。指導とは、そんなに簡単なものなのだろうか。

指導とは、その人の心に火を灯し、その人が心を動かし、その人の行動が変わることである。教師と生徒であれば、生徒の心に火を灯し、生徒が心を動かし、生徒の行動が変わることである。そう簡単なことではない。そもそも心に火を灯すことが難しい。指導する側の“翻訳力”も問われる。相手に通じる、相手が理解できる言葉を使わなければならない。

例えば、生徒が通常では考えられない行動をとったとする。その場にいた先生が「言語道断だ」と言ったとする。たぶん生徒には通じていない。生徒は叱られたということは理解できるだろう。だが、自分のとった行動が「とんでもないこと。もってのほか」であることはわからないのではなかろうか。

言語道断、その通りなのであるが、多くの生徒にとっては難しい言葉である。ここは、その生徒に通じるように、その生徒が理解できるような言葉を使うようにしなければならない。

私の立場でも、先生方を指導するといった使い方をする。ただし、私の場合は、指導するのではなくて、一緒に考えていくというスタンスである。とは言いながら、私の働きかけにより、先生方の心に火が灯り、先生方が心を動かし、先生方の行動が変わらなければいけない。私の翻訳力の問題でもある。

先生方の行動が変わるとは、授業が変わる。生徒との接し方、生徒への言葉かけが変わる。保護者との話し方が変わる。同僚との接し方が変わるといったことが考えられる。どれも容易いことではない。かなり難易度は高い。

それでも、先生方が変わるきっかけになればと、その先生に合わせて言葉を選びながら働きかけをしていく。物事にはタイミングというものがある。同じような働きかけをしても、心に火が灯る場合とそうでない場合とがある。その人の心にスイッチが入っているかどうかである。これは、生徒も先生方も同様である。

生徒や先生方が心を動かされるのは、人の話とは限らない。書物などの場合もある。昔、まだ若かった頃に、大村はま先生の本を読んで、脳天に一撃をくらったような衝撃を受けたことをよく覚えている。私は、大村はま先生に間接的にではあるが、指導していただいた。私は、激しく心を動かされ、自分の授業や生徒への指導を振り返った。そして、自分を変えていった。

指導とは、かくも難しいものである。だが、教育の場には必ず必要なものである。であれば、常に「指導とは」ということを念頭に置きながら教育活動に勤めたい。